

鴨長明と西行

浅見和彦

一

鴨長明の生年は一一五五年（久寿2）ごろ、没年は一二二六年（建保4）で六二歳くらいで生涯を終えている。一方、西行は生年は一一一八年（元永1）没年は一一九〇年（建久1）で、享年七三歳である。両者の年齢差はおよそ三十七歳、相当の開きがあるといえはばある。しかし、西行没年時、長明三六歳に達しており、二人は一定の期間ではあるが、歌人としての活動期をともにしていたことになる。

長明はその著作からすると、西行のことは充分知っており、敬愛していた可能性がある。すでに知られていることであるが、『方丈記』の山野の閑居を述べるくだりで、

山鳥のほろとなくを聞きても、父か母かと疑ひ、峰の鹿かせの近くなれたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或はまた、埋み火をかきおこして、老の寢覚の友とす。おそろしき山ならねば、ふくろふの声をあはれむにつけても、山中の景氣、折につけて、つくることなし。
（方丈記）

この部分はいくつかの先行作品を下敷にしている。手短かに述べれば、

山鳥のほろとなくを聞きても父か母かと疑ひ
は、行基の作と伝えられる、
（方丈記）

山鳥のほろほろと鳴く声聞けば

父かと思ふ母かと思ふ
（玉葉集・二六一四）

という歌を下敷にしているし、

峰の鹿の近くなれたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る
（方丈記）

は、西行が大原にいる寂然に送った、

山深み馴るる鹿の気近さに
（山家集・二二〇七）

世に遠ざかるほどぞ知らるる

を踏まえていることが明らかである。

この時、西行は高野山において、大原隠居の寂然に十首の歌を送った。その初句はすべて、「山深み…」で統一されているという著名な歌群で、西行の代表的な作品の一つといえることができる。これに

対して寂然が応じた十首歌は結句をすべて「大原の里」でまとめ、二人の友愛関係の深さがしのばれる贈答歌である。ちなみに寂然の西行への返歌は、

もろともに秋も山路も

深ければ鹿ぞ悲しき大原の里

(山家集・二二一七)

で、内容、措辞の面で、丁寧に応答しているといえる。

西行、寂然の十首の応答歌群は高野、大原という隠棲地の生活をみごとに歌い上げたもので、長明は揺さぶられること少なくなかったであろう。この歌群の一首、西行歌の、

山深み気近き鳥の音はせで

物恐しきふくろふの声

(山家集・二二〇三)

を受けて、鴨長明は、

恐しき山ならねば、ふくろふの声をあはれむつけても、山中の景気、折につけて、尽くることなし。

(方丈記)

と引歌のかたちで引用し、西行歌への少なからぬ関心を持っていたことが知られるのである。

二

おおよその推定であるが、長明の歌林苑への参加は一一八三年(寿永二)ごろで、長明二九歳ごろのことかとされる。そのころ西行は六十六歳で高齢ながらもちろん存命している。西行はその歌集類から俊恵、源頼政、殷富門院大輔、隆信、寂蓮、登蓮、空仁など歌林苑に出入りしていた歌人たちとの交流を確認することができる。し

かし残念ながら現在知りうるかぎりの範囲であるが、西行と長明の直接的な出会い、接触があつたことを示す資料はない。西行側の資料から知られる人々は俊恵はもとより頼政、登蓮など長明と関わりが深い歌人たちであつて、西行の歌集類に長明の名が見えないことは、たまたまの偶然のことなのか、それとも、何か理由があるのか、判然としない。しかし、歌林苑歌会の歌題の一致の事実などから「西行が何らかの形で歌林苑と関わっていた確率はかなり高い」とされるわけで、西行と長明が際会する機会があつたことは否定できないと思われる。とくに歌林苑は概して開放的、友好的な雰囲気集まりであつたと想像される。たとえば『頼政集』に載る源頼政と空仁の贈答歌は、

少別当入道空仁と申歌よむもの侍ると、年比聞きわたり侍るに、かれも聞きて、たがひにいかであひ見てしがなと思ひけるほどに、歌林苑にて人丸が影供し侍りける日会ひて、歌詠みなどして後、ほどへていひつかはしける

音にのみ聞き聞かれつつ過ぎすぎて

(頼政集・六二九)

返し

恋ひこひて見き我見えきその後は

忍びぞかぬる君はよにあらじ

(頼政集・六三〇)

頼政、空仁の両者は前々から互いの存在を知ってはいたが、ようやく歌林苑での人丸影供の折りに会うことができた。その喜びを誹諧歌風の恋歌仕立てで、心懐を伝えあつたわけである。歌林苑会衆

や同人たちの間ではこうしたやり取りがしばしば行われていたように、歌林苑という場所が同人間の交流の場となっていたのである。

さらに歌人同士の交誼はそれぞれの家集の中から数多く拾うことができる。歌林苑に参会したと推定される人数はおよそ四十名程度と推計され、同人であった鴨長明はもちろん、西行も「何らかの形で歌林苑と関わっていた確率はかなり高い」といわれている。西行と長明が歌林苑で際会する機会もありえたことと思われる。

しかし、二人の親密度はいかほどであったのかは分らない。先に述べたように二人の交流を示す資料、作品が現時点で知られていないので、残念ながら不明としかいいようがない。長明の歌林苑への登場は一一八三年（寿永2）ころ、長明二十九歳ころと推定され、そのころ西行はすでに六十六歳となっていた。長明は俊恵や中原有安らからその才能を認められ、将来を囑望される存在だったとはいえ、西行と較べれば、やはり弱輩であり、その立場は不安定であったといえよう。

一方、西行といえは、押しも押されぬ著名な大歌人、天皇、院、女院など貴顕との交流も非常に多かった。長明からすれば、まさに西行とは仰ぎ見るような存在であったのであろう。年齢といい、歌歴といい、社会的身分といい、二人の懸隔は想像以上に大きかったのではなからうか。そう考えていくと、西行の歌伴に長明が出てこないというのも、さほど不思議なことではなかったかと思われるのである。

三

西行の歌数はおよそ二三〇〇首といわれる。その大部な詠出歌の中で西行は家族を歌わない。父も母も妻も子も、明確にそれらの人々を取り上げて歌った歌は知られていない。わずかに『聞書集』に載る「地獄絵を見て」という連作の中で、

あはれみし乳房のことも忘れけり

我が悲しみの苦のみおぼえて

たちをの行方を我も知らぬかな

同じほのほに咽ぶらめども

（同・二二二）

の二首があるくらいで、直接、家族を歌作の中で歌い上げたものはないといつてよい。

なぜなのであろうか。これはある意味、現代の作家、芸術家たちにもいえることであるが、作者たちの中には自分の家族や個人的な事情を明らかにすることを嫌う人々がいる。もちろん、なかには個人的な事柄をつつみ隠さず公けにして、あるいは暴露して、またそれを製作活動のバネとするという人々がいることも事実である。たとえば近代の私小説家などがその類いである。

だが西行は明らかに前者。すなわち自身の家族や係累についてはほとんど、あるいは全く触れず、作品の世界と個人的な実生活はできる限り遮断し、芸術的世界に専念し、家族、家庭などの生活的な事柄から自由であらうとしたのが、西行だったのではないだろうか。二三〇〇首もの歌作を残しながら家族にかかわることは意図し

て歌っていない理由は西行の文学者としての信念にも近い不可侵の生き方であったといつてよいかも知れない。

四

鴨長明に『発心集』という仏教説話集があることは広く知られているが、その中に二話ほど西行が登場してくる。

まず最初は巻六・十二「郁芳門院の侍良、武蔵野に住む事」である。西行が東国を修行していた時、八月十日余りの月の美しい夜、武蔵野にさしかかる。昼のような明るい月夜で

花の色々露を帯び、虫の声々風にたぐひつつ、心も及ばずはるばると、野中に経の声聞こゆ。(発心集)

という情景を目にする。不思議に思つて西行が声を尋ねていくと、そこには

わづかに一間ばかりなる庵あり。萩、女郎花を囲ひにして、薄刈萱、萩などを取りまぜつつ、上には葺けり。その中に年たけたる枯声にて、法華経をつづり読む。(同)

まさに絵に描いたような武蔵野の風景で、『撰集抄』『西行物語』『西行物語絵詞』など各書に収載されている。

「西行」が庵主に誰何すると、その者は、「昔、郁芳門院の侍の長」であったが、門院の没後、出家し、ここの草花の美しさにさそわれて、野中に跡をとめることになつたと答えるのだった。郁芳門院は白河天皇鍾愛の皇女媼子内親王で、その死は嘉保三年（一〇九六）で、まだ二十一歳の若さであった。

西行は二度、陸奥へと足を延ばしており、年代的にいつて初度の旅の折の話かと推定されている。注目したいのは、この武蔵野の中に営まれていた「一間のばかりなる庵」と、長明が日野山中に営んだ方丈の庵とその雰囲気似通っていることである。長明はこの西行が偶目したという庵のたたずまいをどこかで参考にしていたとも考えられる。

五

『発心集』に載るもう一つの西行説話は「西行が女子、出家の事」(六ノ五)である。かなり長大な話であるので、概略を記すと、西行が出家する時、西行は賞愛する我が娘の世話を「弟」に頼んで各地の修行へと旅立った。二、三年経つたころ、京に立ち戻り、娘のことを思い出し、ふと弟の家の近くに立ち寄り、庭で遊ぶ娘の姿を目撃する。五歳ほどになっていた娘は顔、かたちも美しく生い育つたものの、身なりは粗末で下種にまじつて遊んでいた。西行は無念に思い、それをずつと心にかけていた。西行の胸中の想いは養家にも伝わったのか、西行の妻と縁のあつた九条民部卿の娘、冷泉殿の養女として西行の娘は育てられることになった。娘は大切に育てられ、十五、六歳まで生い育つ。養母の冷泉殿には腹違いの妹がいて、彼女に播磨三位藤原家明という人物を智取りをすることになり、そこで西行の娘は下仕えとして働くことになった。

それを洩れ聞いた西行は不満に思い、娘をとあるところに呼び出し、自分の考えをこう伝えた。「長じたら、帝の后や内親王の女房

になつてほしいと考えていたが、このような二流どころの雑仕として働くことなどは、とても承引できない。そんな勤めは断わり、出家して、母の尼の側で暮らせという」というのであった。娘はしばらく思案ののち、その場で父の言葉に従い、尼となり、母親とともに高野山の麓の天野というところで暮らしたという話である。

(発心集)

西行の歌人としての活躍や、陸奥や四国などへの旅などはよく知られているが、西行の家族や一族についての情報は希少で、この西行の娘の出家にいたる話などは貴重な伝承を伝えていっているとよい。いうまでもなく、『発心集』は説話集であるわけで、どこまで事実を伝えているかについては慎重さが要求されることはいうまでもない。

しかし本話は人物の紹介も正確で矛盾するところがなく、かなり信憑性が高いとされる。西行の剛い性格も激しい気性もうかがい出てる。おおよその研究者たちもほぼこれを事実譚と考えているのも宜なるかな、「西行伝の史料として価値あるもの」と³⁾とされている。

西行の勤めに従つて、出家した娘が過ごしたとされる「高野のふもと」の「天野」(和歌山県かつらぎ町)は当時、高野山に籠った父や夫などを慕い、女人禁制の高野山ゆえ親族の婦女子が隠棲したところとして有名である。近くには丹生都比売神社があり、近傍には西行妻と娘の墓と伝えられる宝篋印塔も現存する。

六

西行と娘では西行が出家前に四才の娘を縁から蹴り落とすという話(西行物語など)などが著名でよく知られている。西行と娘についてはとかく話題になることが多かったといえよう。しかし、この『発心集』の話は『西行物語』などの説話とは違って、格段に事実性が高く、信憑性に富むものといつてよい。

長明はどうやってこの西行に関わる情報を手に入れることができたのであろうか。その取材源については全くもって不明であるが、長明が西行から直接聞き知ったという可能性はなくはないが、前にふれたように西行は個人的、家庭的なことがらについては、ほとんど語らず、秘匿に近い状態であったことからすると、歌林苑あたりの歌人仲間から長明は聞き知ったのかもしれない。いずれにしろ西行のかなり身近の個人的な事情に関わることであったことは間違いない。長明としては敬慕する西行の貴重な情報を手に入れ、それを『発心集』に書き入れたわけである。

一方、西行はどうであらうか。西行からすれば、自らの心中にとどめおいていたような娘との一件がかくもあからさまに、かつ細密に語られることは、当然、西行にとつては好ましからざることであつて、それをこのようなかたちで公けにされることは、おそらく心外なことであつたらう。

ちよつと断つておくが、『発心集』の成立年時は不明であるわけで、おそらく長明の晩年ごろと推定されている。それゆえ西行が長明作

の『発心集』を直接披読した可能性はほとんどないかと思われる。西行が見た、あるいは知ったとすれば、長明が西行と娘のいきさつをどこかで口外していたか、さもなければ何らかのたちで披露していることを聞き知ったということになる。いずれにしても、それは西行にとって承服しがたいことで、長明という人物を敬遠し、親密な交流は当然忌避していたことであろう。ひよつとすると西行側の資料や詠作に長明の名が出て来ないのも、こうした裏の事情があったのかもしれない。

七

長明という人は隠密にしておくべきことを意外にあっさりと言したり、公衆の面前で公けにしたりするところがある。「せみの小川」の秘儀を歌人仲間に勝手に語り、下鴨神社祇宜の鴨祐兼の憤りをかっただけでも、未伝授の秘曲を聴衆の前で無許可で演奏したと追及されたことも、嚴重に守秘されなくてはならないことを、わりと気楽に越えてしまうようなこともあった。ひよつとすると西行は長明のそんな性向を知っていて、あえて親近しようとはしなかったのかもしれない。西行と長明との間にはどうやら微妙な問題があったのではと、ついつい想像したくなる。

鴨長明には、伊勢への旅行を記した『伊勢記』という紀行文があったらしい。「あつたらしい」というのは残念ながら現在完本のかたちでは残っておらず、各書に引かれる逸文（『伊勢記拔書』など）によって一部が伝えられるのみである。その残された中に、

西行法師、住み侍りける安養山といふ所に、人々歌よみ連歌などし侍りし時、海辺落葉といふことをよめる

秋を焼く神崎山は色消えて

嵐のすゑにあまの藻塩火

（伊勢記拔書）

という長明の歌がある。これによれば、長明は西行がいたとされる安養山で人々と和歌、連歌を楽しんだことが知られる。「安養山」という場所は三重県度会郡二見町の地名で、当時安養寺という寺があった。

一九九二年からの発掘調査では鎌倉前半ごろの土器、瓦、将棋駒、墨書木製品などが多数出土し、いずれも中世の生活ぶりを示す貴重な品々であった。さらに注目すべきは三間四方の方形の建物跡が発見され、その構造は南側に半間の縁、東側に廂が付設されていることがわかった。まさしく長明が日野山中に建てた方丈の庵の原型を見るような感じである。「西行法師、住み侍りける安養山といふ所」（伊勢記拔書）に長明は実際に訪れ、実見していることは間違いないので、この庵も長明は自分の眼でたしかめ、後年の方丈の庵の建造の参考にしたのではないかと思われるのである。

この安養寺遺跡からの眺望はなかなかなもので、目の前を五十鈴川がゆったりと流れ、遠くには伊勢湾も望める勝景の地である。ここで長明は人々と歌会を開き、和歌、連歌に興じた。和歌からは長明の充足感、満足感が伝わってくる。

しかし残念ながら長明はこの伊勢の地でも西行とは会っていないようである。長明の伊勢行は諸説あって特定できないが、通説では

一一八六年(文治二)、建久元年(一一九〇)ともいわれており、後者の場合は西行の没年(二月一六日)にあたり、長明が伊勢の地で西行と出逢う可能性は低いと思われる。前者はもちろん西行は存命中であるが、後者の場合、西行は東大寺料砂金勸進のため、陸奥国平泉へと向かい、途中、鎌倉に立ち寄り、源頼朝と面談していることがわかっている(吾妻鏡。文治二年八月一五日)。

八

長明の伊勢行は、

伊勢へ下りけるに、野路うち過ぎて、石部河原といふところに友待つほどに、風のいたく吹けば、蓬の中によりふして

横田山石部河原の蓬生に秋風寒み都恋しみ(伊勢記抜書)

とあるところから、その出立は秋冬の頃と推定されるわけで、長明が西行と伊勢で偶会した可能性は低いといわざるをえない。

西行の足取りをたどれば、西行は八月十五日、鎌倉で頼朝と会っているわけで(吾妻鏡)、逆算して西行の伊勢出立は七月から八月初頭と推定される。一方、長明の伊勢行は「秋風寒み」(伊勢記抜書)とあることから、秋の冷気がすでに迫ってきている季節であったことが知られる。この推定が正しければ、今回も長明は西行との面談の機会がなかったということになる。

ここからは全くの想像でしかないが、西行は長明と会いたくなかった。長明が伊勢に来るということを何かの手づるで聞き知った西行は長明が到着する前に東大寺の砂金勸進の旅に出発し、伊勢を

あとにした可能性はないのだろうか。

西行と長明の間にはひよつとすると微妙な透き間風が吹いていたのかもしれない。西行と長明との間にはどうにもすれ違いがあったようである。長明からすれば、西行は敬愛する先達であったが、西行からすると、鴨長明という男はいささか小面倒な存在だったのかもしれない。

注1 石川暁子「歌林苑をめぐる歌人たち」(和歌文学研究54 一九八五年四月)

2 同前

3 三木紀人『方丈記 発心集』(新潮日本古典集成 昭和五十一年十月)

(あさみ・かずひこ 本学名誉教授)